



美術館と企画展の説明を、来館者に分かりやすく動画と音声で紹介

「専門」を持ち寄り、 新たな「知」の創造を ～広島大学と平山郁夫美術館の取組～

取材協力：平山郁夫美術館 ☎0845-27-3800

現在、広島大学と平山郁夫美術館では、自治体と民間の垣根を越えて協力し合い、それぞれ得意な分野を生かしつつ、地域が直面する様々な課題を克服し活性化していく、『包括連携協力』に取り組んでいます。

広島での被爆体験から平和を祈り、世界中で文化財保護活動に取り組まれた平山画伯の意志を継ぐ当美術館の理念と、広島大学の「平和を希求する精神」「新たな知の創造」などの理念とが合致し、実現に至ったものです。

広報おのみち2月号で紹介した「世界遺産 敦煌」展では、シルク

ロードや敦煌を研究している荒見泰史教授と、博物館情報学を専攻する匹田篤准教授が多くの提案と作業を行い、重要な役割を果たされました。

敦煌に精通し、頻りに現地を往来する荒見教授と、情報発信の手法について理論的に解き明かす匹田准教授が学問分野の枠を超えて協力し、直近の現地映像を使用した臨場感の高い展示物の作成や、ユニバーサルデザインやメディアコミュニケーションに配慮した館内の展示レイアウト検討、大型ディスプレイの導入等を行い、来館者の満足度を大幅に向上させました。

また、提案は民族衣装の体験や、カフェラウンジのメニューにも及びました。

協定を結んだ平成30年11月以来、広島大学は、留学生のインターンシップ斡旋、学生による瀬戸田町の地域イベントの企画・運営参加など積極的な連携を行ってきました。このような官民や世代を超えた連携が更に広がり、既存の分野を超えて議論が活性化することにより、尾道の次の時代へのビジョンや計画、活動が生まれていくことが期待されています。



荒見教授(右)と匹田准教授



カフェラウンジのメニュー



荒見教授が現地で購入した中国西北部の民族衣装を体験可能



チームワークとICTで有害鳥獣を撃退 三庄町野犬イノシシ対策隊 ～バスターズ～

因島三庄町は、因島の南東部にある人口3,500人ほどの町です。イノシシをはじめとした有害鳥獣による被害や野犬の問題については、市内各所で頭を悩ませて聞いて聞かれますが、因島三庄町でも以前より苦慮していました。年々増え続ける農作物の被害や、通学中の児童が野犬にほえられる事例も相次いできたことから、平成28年に「三庄町野犬イノシシ対策隊(通称:バスターズ)」を結成し、町をあげて対策に取り組むことにしました。

今までの活動を進化させよう

これまでもバスターズは、区長会や猟友会とも連携し、狩猟免許所持の隊長・隊員を中心に各区に担当の隊員を配置。住民からの情報収集や設置した捕獲檻の見回りを行うとともに、イノシシが近づきにくい環境づくりにも取り組んでいました。また、公民館だよりにより野犬の保護・有害鳥獣の捕獲数を掲載し、住民にお知らせ



オリジナルの罠で1,146羽を捕獲(2019年)

と注意喚起も行ってきました。

しかし、年々増える個体数や隊員のほとんどが高齢者ということで、マンパワーの限界も感じていました。そこで、対策会議で話し合い、赤外線センサーや防犯カメラといったICT機材を活用することや、罠を独自開発することを決めました。そのような中、区長会から情報提供をうけ、「市民活動支援事業(市民活動団体部門)」に申請し、補助を受けることができました。

隊員と住民のチームワーク

野犬保護については、住民に餌やりをしないことや飼犬の置き餌をしないこと、市や警察、動物愛護センターの指導・協力を得ていることを根気よく説明し続けた結果、目撃情報を寄せていただくことが増えています。また、公民館だよりを見てバスターズで活動し社会貢献したいという定年退職後の隊員も増えています。

住民からの目撃情報や檻の見回り、住民への広報といった一つひとつの積み重ねにより、バスターズ隊員だけではなく、住民も一体となった活動になっているのではないかと考えています。

因島から市内全体に

2019年の保護・捕獲実績は、野犬59匹、イノシシ(タヌキ含む)124匹、カラス1,146羽でした。

今後も引き続き、イノシシなどが近づきにくい環境づくりに取り組んでいくため、罠の改良や設置場所の移動などの検証を繰り返しながら、より効果的な対策を探っていきたいと思います。

また、因島三庄町での取組が先進事例となって因島全体や、市内各地域の対策の一助となれば幸いです。

☎三庄公民館 ☎0845-22-0418

■料金や申込方法の記載のないものは無料または申込不要です。 日時・期間 場所 対象 内容 定員 料金 持参物 電子メール 締切